

京都市基本計画審議会 第2回融合委員会
摘 録

日 時：平成21年12月22日（火）9:30～11:45

場 所：京都市国際交流会館 特別会議室

出席者：

あきづき	けんご	
秋月	謙吾	京都大学大学院公共政策連携研究部教授
あさおか	みえ	
浅岡	美恵	NPO法人気候ネットワーク代表，弁護士
おいけ	かずお	
尾池	和夫	財団法人国際高等研究所所長，前京都大学総長
つかぐち	ひろし	
塚口	博司	立命館大学理工学部都市システム工学科教授
にしおか	しょうこ	
西岡	正子	佛教大学四条センター所長・教育学部教育学科教授
ひらい	せいいち	
○平井	誠一	京都市未来まちづくり100人委員会代表幹事，株式会社西利代表取締役専務
ほりば	あつし	
堀場	厚	京都経済同友会特別幹事，株式会社堀場製作所代表取締役会長兼社長
まつやま	だいこう	
松山	大耕	未来の担い手・若者会議U35議長，妙心寺塔頭・退蔵院副住職
むねた	よしふみ	
◎宗田	好史	次代の左京まちづくり会議座長，京都府立大学大学院生命環境科学研究科（環境科学専攻）准教授

以上9名

◎…委員長 ○…副委員長

（50音順，敬称略）

1 開会

尾池会長

冬至の日の朝に御苦労様です。冬至は日中が一番短い日だが、夏の間は熱がたまっているので寒くなるのはこれからという暦である。オーストラリアでは一番日中が長い日で今日辺りサンタクロースがサーフィンの練習をする日ではないか。

また、現在、市長がコペンハーゲンに行かれているが、デンマークは、ブータンの王様が唱えた「国民総幸福度」で世界ランキング一位の国である。市長がそこから何を感じたかをぜひ聞いておいてもらいたい。

一方、日本は、総幸福度が先進国のうち最下位というデータが出ておりいつも寂しい思いをする。また、それと対になっているが自殺率が最近上昇し、世界9位か10位にある。

国際都市として、世界の中での京都ということを念頭に置きながら10年後の未来像を描くことが我々の仕事である。世界の中での位置付けやよその国々のことも念頭に置いて議論していただきたい。よろしくお願いします。

2 議事

(1) 未来像について

①今後のスケジュールの検討

宗田委員長

未来像の検討に当たっては、動かしがたい深刻な与条件とこの10年の喫緊の課題を確認したうえで検討したい。資料1に記載している「地域主権時代のモデル都市～京都発、京都流～」は未来の京都創造研究会報告書に書き込まれた都市経営の理念を要約したものである。ここから御議論いただきたいと考えているが、何か御意見はあるか。

———特に御意見なし———

宗田委員長

今後、議論がここに戻るかもしれないが、この形であと2回の委員会を経て未来像、重点戦略を描きたい。

②未来の担い手・若者会議U35からの若者提案の最終報告

松山委員

未来の担い手・若者会議U35は概ね35歳未満の若者26名で構成し、6つのユニットに分かれて審議している。本日、最終報告を行い、若者ならではの観点を基本計画審議会の議論に盛り込んでいただきたい。

また、先日、第3回世界アーティストサミットとの連携によるイベントを

行った。これは6人の若手アーティストが2週間京都に滞在し、世界の諸問題の解決方策を提案するものである。

若者会議との連携では、匂いのアーティストから、「歩くまちを実現する匂いを楽しむ観光」など、若いアーティストの観点から京都の強みを発見していただいた。

次に、審議レポートの発行について、本審議会の各部会等を若者会議メンバーが傍聴し、結果を分かりやすい文章で感想を加えつつレポートにまとめて発信している。

このような取組と並行し、若者会議として最終の提案をまとめてきた。

まず、未来像①真のワークライフバランスを実現するまちについてである。これは、仕事、家庭に加えて社会貢献の3つを充実させる人を一流の社会人と考える真のワークライフバランス推進都市であり、女性が結婚、妊娠、出産といったライフイベントに捉われることなく、女性の視点や能力を活かし、活躍できる場やサポートのあるまちである。

未来像②若者ならではのつながり方のあるまちについてである。これは、交流の観点から、市民みんなが少しずつ無理なく努力することで、いい京都を作り上げていきたい。そして、交流人口160万人、多様な住まい手が交流することで永住を促進したい。京都に魅力を感じる若者らの生活に伝統産業や伝統文化が根付き、職業としても選択可能で、世代交代により活性化するまちという未来像を描いている。その担い手の観点からは、市民の声が市政を形成、我がまちの未来の担い手として市政に参加できる。そして、市役所がまちのリーダー育成所として機能する。一つは、カリスマ公務員を作り、その人を中心としてまちのリーダー育成所をつくれないかというものである。そして、未来型の番組の仕組みが機能し、町衆力とまちのアイデンティティが向上していくまちを描いている。

未来像③激変する10年間でリードするまちについて、超高齢化社会において、好奇心旺盛な高齢者の活動意欲を満たす、自由でエキサイティングなまちを提案する。我々的高齢者のイメージを破り、高齢者がもっといきいきと活動するまちでありたい。そして、交通・環境問題を解決する安心な観光ツールである「パーソナルモビリティ」が発達し、世界に発信するまちでありたい。来年、電気のスクーターができるし、セグウェイというツールもある。環境にやさしく無理なく使えるものを取り入れながら、車があまり走らない環境にやさしいまちになればと思う。

これらを実現する重点戦略として、まず、重点戦略①真のWLB実現戦略についてである。これは、伝統産業の活性化が後継者問題、女性の社会進出、福祉問題を一挙に解決する融合施策で、和のF1チーム（和の産業・文化に

従事する若手職人や次期家元等）が新たな京都ブランド創造に取り組む。また、ハローワークではなく、ハローライフとして、市が運営し、仕事・家庭・社会をマネジメントしてくれるワンストップサービスの機関を設置してはどうか。

重点戦略②リゾーム（根状）・ソーシャル・キャピタル戦略についてである。1%運動の推進として、子どもからお年寄りまで無理のない範囲で目標を立て、京都、地域、未来のために行動する。その一つ目の目玉として、観光に関連する社寺仏閣、料亭、ホテル等が売り上げの1%に相当するファンドを作り、それを景観保全や文化保全に活用するなどの取組を税金ではなく勝手連的に実施してはどうか。そして、学生からなるコーディネート集団「リゾーム」とメッセンジャリングシンクタンク「京都都市政策研究所」による新たな市政参加の仕組み、シンクタンクも京都ならではのものを作ってはどうかと考えている。

重点戦略③既成概念を取り払う新ツール導入戦略について、先ほど申し上げたセグウェイや電気スクーターによる環境と人にやさしいまちづくりを進める。また、「グラン・リーフ」発刊については、サンプルをお配りする。これは、今までの高齢者の既成概念を打ち破り、高齢者の方々がより生き生きと自分らしさを求めながら京都で生活することをお手伝いできるような雑誌を提案いただいた。やろうと思えばすぐにでもできる提案である。

そして、今後の未来の担い手・若者会議U35の活動については、京都市基本計画審議会における議論を市民にお伝えし、対話するために活動する。そして、若者会議からの提案を具体化させる活動を行って参りたい。本日もそうだが、審議会レポートを継続して発行するとともに、第1次案、第2次案が出される時期をめぐってパブリックコメント、シンポジウムの実施について京都市を支援し、より市民の声を反映できる方法を提案していきたい。

宗田委員長

若者の観点を基本計画に反映する観点から、若者会議からの提案は今後の検討素材として参考にしていきたい。

堀場委員

若者会議のメンバー構成はどういう人たちなのか。

松山委員

メンバーは学生、祇園の芸妓、ラジオのDJ、NPO法人など多岐にわたり、26人。また、京都市役所職員有志も加わり、約40名で議論している。

尾池会長

35歳という意味は。

松山委員

国などの若者の定義を目安としたものだが、35歳以上の方もいる。

宗田委員長

未来像①に社会貢献という言葉が出ているが、もっと柔らかな言い方があると思う。未来像②に「みんなが無理なくすこしだけ努力することによってつくりあげる京都」という世代と世相を感じさせる表現があり私は好きだ。社会貢献というと無理を感じさせるが、もっと自発的で、我が町ということをかきたてる幅広いものを目指していると思う。

松山委員

おっしゃるとおり、我々のイメージはみんなが少しずつ努力するというもの。検討に当たって私が委員の皆様をお願いしたことは、なるべく横文字を使わず、分かりやすい言葉をとということ。これを一言で置き換えると社会貢献という言葉となったが、分かりやすい言葉を検討したい。

西岡委員

未来像①にワークライフバランスと書かれているが、すこやか部会でもこのことを話し合っている。ワークライフバランスという言葉を使うことで、女性だけでなく男性の働きすぎの問題も示している。ここでは女性を取り上げられており、男性がないのはなぜか。

松山委員

この未来像は、実際に妊娠されている女性が提案されたものだが、今後、男性の視点も盛り込んでいきたい。

宗田委員長

男女がライフイベントに参加し、ワークライフバランスを実現することが成長モデルとなる。とても大切なことなのでぜひ検討してもらいたい。

塚口委員

未来像③で交通、環境問題に関し、「パーソナルモビリティが発達し世界に

発信するまち」とある。効率的に都市の中で移動手段を確保しようと思うと個別ではなく集約した公共交通手段がよいと思うが、これを検討するに当たり、現在の自動車が環境負荷の少ないものになれば、個別の手段を指向するという意見が強かったのか。

松山委員

既存の地下鉄、バス等を補足する形で、観光地や駅、中心地などで、こうした個別の手段を提供し、公共交通機関でカバーできないところをサポートする形を検討した。

尾池会長

電気で走るスクーターなども提案に出てきたが、電気で走らせるとなるとそれを実現した場所では排気ガスが減るが、電気を作るためにはどこかで炭酸ガスを排出している。京都市の分をよその地域で代替わりしていることとなり、電気そのものが改善されないとうまく行かない。京都市だけにメリットがあってはならない。また、ガソリンを電気に変換するには、エネルギーロスが出るため、直接使うほうがエネルギー効率がよい。専門家の意見を聞きながら電気にすれば何でもよいというものではないことの学習を深めてもらいたい。

堀場委員

これだけ広い範囲を効率よく提案できていることに感銘を受けた。ポイントをついておられる。何か魅力的なものを打ち出していないといけないし、すべて網羅するのは現実的に不可能である。どのようにリードされているか知らないが、すごいという印象を受けたのでぜひ継続して議論を深めていただきたい。

平井副委員長

未来像②の永住促進、京都で職業を選択というのはありがたいことだが、大学生は京都で仕事を得られない、求めている仕事がないという人もいる。そういう人たちと京都をいかにつないでいくのかということが大切である。また、伝統産業による職業を創設するなどについてどういう議論があったのか。ここをもっと深めてもらいたい。

松山委員

仕事はすぐにできるものではないが、やる気がある方の起業をサポートす

る仕組みが重要という話があった。また、住居の問題も大きい。住むのにお金がかかれば市内に住まない。そのため、例えばニュータウンの空き家、町家を若者に安く提供するなど。また、伝統産業では必要なところに人材が行っていない。そのギャップを埋めるシステムを検討できないかという議論があった。

③未来像の検討

宗田委員長

事前に資料を送付しているが、これは第1回融合委員会の結果を踏まえ、事務局と相談し、作成したものである。

———（事務局から資料説明）———

宗田委員長

21のキーワードで未来像を整理したが、すべてを載せると総花的になるのでぜひ融合して絞りたいと考えている。絞り方について御意見があればお願いする。

尾池会長

絞りこむ前に、環境問題や京都市全域を考えると、今の議論は都市部、市街地が中心となっている。京都市には森林も多いし、森林の環境への貢献度も高い。森を育てる観点が大事。北山杉の保全などの森づくりを若者が手伝うなど、社会貢献という視点からも低炭素化に貢献するし、この貢献度は見積もれると思う。絞り込む前に山間部に焦点を当てた議論が必要である。前回の議論でも出ていたと思うので、ぜひ抜け落ちないように、森を育てるというキーワードではどうか。

浅岡副会長

森を育てるだけでなく、都市部を含めて自然環境を重視するというニュアンスが必要。自然があることは当たり前に思われるかもしれないが、これが失われていくことのリスクがある。また、温暖化の「進展」と書かれているが、書くとすれば「進行」。進行を止められないということ。昨夜コペンハーゲンから帰ってきたが、今回のCOP15（国連気候変動枠組み条約の締約国会議）においては、特に産油国が前面に強く出て、途上国がそれを使いながらある意味、温暖化防止のために現状を変えることはできないと言い、先進国にも同調するような要素があった。そのような中で、京都がいかに一步前に出る姿勢を持って何ができるかが重要。そのベースには元々の自然の balan

スが崩れていることがあり、そのためには森の保全だけでなく都市部の自然も共通する問題がある。うまく二つの言葉をつないで欲しい。

宗田委員長

未来の京都創造研究会の重点戦略の一つに、「京スタイルしたはる」という提案があり、未来像としては京都らしさを活かした環境先進都市が上げられている。

環境に関する未来像は必要だと思うが、いかにまとめればよいか。

他の超高齢化、人口減少、京都市の都市特性、低経済成長はいずれも環境に向かってというか、環境との関係で方向が決まってくるような気がする。

尾池会長

環境という言葉が自然環境なのか、地球環境なのか、都市環境なのか何を指しているかが分からない。温暖化の進展がまずいのは分かるが、地球そのものは、現在は間氷期が終わり、温暖化の時期で、大体上がりきってほぼ安定の状態でじわじわ上がり続けている時期にある。わざと冷やすと自然に逆らうものとなる。温暖化というのは普通のことで、それがものすごく加速されていることが問題であるという認識が必要である。

堀場委員

確かに地球温暖化、低炭素化は重要だが、京都が目指す未来像のスケールを決めておかないと、非常に細かい話から大きな話が入り混じってしまう。キーワードとしてそのようなものがあることは大切だが、議論するには対象を絞った方がよいのではないか。

浅岡副会長

ここで世界や国の政策そのものを議論するわけではない。温暖化の進行は、大きな地球のサイクルはあるが、人為的な温室効果ガス排出が急激に増加し、温暖化を加速しているので、人為的な排出を下げなければいけないということ。低炭素というのは2050年に80%削減を実現していった2度の気温上昇にとどめられるかどうかという位置付けで考える。そのプロセスとして今後の10年、20年を考えていく必要がある。その中で森をどう拡大していくか、都市の中の緑をどう拡充していくかが大きな話。また、電気自動車にすれば解決するものではないといったことはまさにそのとおりだが、交通を化石燃料に依存しない形など、京都として社会の在り方が変わらなければならないということを考える必要がある。

宗田委員長

京都市の基本計画の中でどのような政策、施策、事業に落とすかはあるが、持続可能な低炭素社会にするということと森を育てるということがペアで一つの方向性を示しているのではないかな。

堀場委員

現実的には、森を育てることと、炭素排出する車を減らすことでは効果が大きく異なる。森林荒廃をボランティアで抑止していくという活動はよいが、低炭素社会の実現に向けての直接的な解決策としては数値的にバランスが合わない。アカデミックな都市として科学的な裏付けをベースに市民を啓蒙することと科学的な判断を両立させなければ京都らしくない。先程電気の話が出たが、京都の電気の多くは京都で発電していない。その辺のバランスを科学的に押さえることも大切である。

宗田委員長

京都市の森林面積は南山城村ほどは大きくないが、少なくない。だからといって京都市が排出しているCO₂を吸収しきれものではない。吸収量を計算はしてみるが、いずれにせよ京都市の森林で京都市のCO₂を吸収できるわけではない。

尾池会長

長い目で見て、森を育てるのには町家など地場産業の振興を図るという面もある。家はその地域で生えている木を使うのが一番よい。森はいろんな面で意識しておくべき。

資料3の枠外の4つの言葉は、都市特性や問題など色々なものが書き込まれており、書き方の統一が取れていない。問題を書くのであれば地球温暖化の進展ではなく、加速が問題。何を書くのかという整理が必要である。

秋月委員

整理に当たっての観点を提供する。一つは、京都しかできないことがある。我々の持つ天賦的、文化的なアセットを守って外国や日本の人々に供与するというのは京都しかできないことで、これはエンジン。もう一つは、「DO YOU KYOTO?」でも「京スタイル」でもよいが、一つの緩やかなモデル。世界が京都のまねをするわけではないが、こういうやり方でやっていこうというようなモデルを発信すること、この2種類があるのではないかな。エンジンはいく

つかあるにしても、基本的にはモデルとしてやるという位置付けで考えると、京都市内で勘定が合わないにというのは深刻な問題にならない。例えば京都が日本中の人材を供給すると力んでも計算は合わないが、「ひとづくりを中心としたまちづくりを進める」という考え方を市民にも外にも発信するのがモデルの考え方。多様なものが並存しているが、私の感触ではモデルの方が多いと思う。京都にしかできないというエンジンはピンポイント的にしっかりと守りつつ、他はモデルとしてやっていこうというものではないか。

宗田委員長

モデルとエンジンとして整理していただいた。尾池会長の御指摘を踏まえると地球温暖化の加速，超高齢化と人口減少，低経済成長が与条件として対応すべきものとして挙げられ，これらは京都の都市特性のうえに立つものである。都市特性以外のものは検討を進める中で増えるかもしれないが，これらを軸に整理していく。

松山委員

次期基本計画を検討するに当たっては，現行基本計画のことを勉強しなければならぬとの議論があった。現行基本計画を見ると，現在の議論とほとんど同じことが書かれており，同じことを議論している。これはできていないということなので，今後，できていないことを洗練してやるのが筋ではないか。現行基本計画においてはどのような未来像を示しているのか。

事務局（大田総合企画局京都創生推進部長）

未来像は今回検討している基本計画のように出ているものではないが，基本構想に掲げているものがそれに該当する。

松山委員

「安らぎのある暮らし」，「華やぎのあるまち」の大きな2点の下に，「すべての人がいきいきと暮らせるまち」，「ひとりひとりが支え，支えられるまち」など5つで構成されていたということか。

事務局（大田総合企画局京都創生推進部長）

基本構想に掲げられた「安らぎのある暮らし」，「華やぎのあるまち」に基づくものとして「いきいきと暮らせるまち」などを目指す姿として置いたと言える。

松山委員

目標を立てながら、同じことを議論しているということは達成できていないということ。これに手を加えていくことを考えるべきではないか。

宗田委員長

できていないことばかりではないが。

尾池会長

現行基本計画に掲げたことはある程度できていると思う。何十年も前から歩いて楽しいまちを目指すと言ってきたが、20年、30年前に比べるとずいぶん歩きやすくなってきたと思う。

京都市民が大切だと思ってやっていることがある程度進んでいるから今後も続けていこうということで、そういう認識もあってよいのではないか。できていないからではないと思う。

宗田委員長

基本構想は今後が続くが、現行計画は終わるので次のものを検討しようということである。

堀場委員

現行基本計画をある程度継続させた形で次に展開していくことは大切。一方、こういう計画には今、直面している、あるいは今後直面するであろう深刻な問題がなかなか出てこない。これからの10年はCO2排出の責任や財政問題などがある。京都の場合、色んなものに恵まれているので、気持ちのうえにも余力があるのか、財政への必死度が他都市に比べて違う。特に財政等のネガティブな問題をどう良くするのかということを直視する必要がある。地下鉄の赤字など、京都市だけでは解決し難い問題を浮き出させなければならない。しかし、そのような問題を市民全体がどう解決していくのか、どう協力したらよくなるのか、あるいはどうにもならないのかという点が見えない。ポジティブな話だけでなく、ネガティブで議論しにくい話を取り上げるという姿勢も必要ではないか。

浅岡副会長

現行基本計画策定時の議論にも参加したが、現在との違いは、この10年で現実の危機も進み、危機の認識ができるようになっていくことが大きな違いである。現実には議論しているよりももっと深刻であり、それを示すことが大切である。

塚口委員

2点発言する。1点目は資料3について、資料1の冒頭に掲げた動かしがたい深刻な与条件に加え、4つ目の軸に京都市の都市特性が書かれていることが分かりにくいのではないか。与条件を中心とした3軸構造とし、京都市の都市特性は別のものとして考えてはどうか。そのうえで、21の未来像を京都市に特に重要なことと他都市にも共通する一般的なことというレイヤーを重ねた方が分かりやすい。そうしないと各項目の位置関係が分からないので、整理していただきたい。

2点目は、公共交通の健全な経営とは何かと考えたときに、公共交通は本来収益性のある事業なのかという問題である。市民の足を確保するという目的があるから、最大限効率的な経営はしなければならないが、それをしても採算が取れない場合もある。京都市だけでなく国の制度に問題がないとはいえない。財政悪化の折、ある事業の収益が上がらないことを放っておくわけにはいかないが、基本計画の場で赤字だからだめだというのではなく、必要性和財政負担のバランスをどう考えるのかということを情報発信し、市民の間で議論していただくことが必要ではないか。

堀場委員

1日に4,000万円の赤字が出ているから公共投資をしないというのは間違いではないか。もともと赤字になるような見通しがあって、市は現実に赤字を背負っているが、市が開発した洛西ニュータウンには財政難により公共交通機関が整備されていない。このような事例は他都市ではあまり見られない。地下鉄とまではいかず簡易な交通機関を整えるにしても、市民が生活しやすいインフラにしなければ人口増加、若い人が住みやすいという構想が成り立たない。交通インフラ、基本インフラ、バスと地下鉄との連携、パーキング場まで考えて、総合的に投資しなければならない。

宗田委員長

もともとの議論は京都市の財政の問題であり、地下鉄を廃止しようと誰も思っていない。地下鉄の1日当たり収支は4300万円の赤字で、簡単に言えば地下鉄は贅沢すぎたということになるが、既にあるものを上手に使っていくための次の方法を考える必要がある。

松山委員からの提案に補足すると、現行の基本計画は、基本構想の直後に作られたものであり、それまでの基本計画は行政計画として市役所が作って示すというものであった。それが前回は「私たち京都市民は」で始まる市民

が自ら率先して進める京都市づくりというものになり、パートナーシップや共汗につながり、市民との協働が非常に進んだ。しかし10年の間に様々な転換が起こり、危機感が共有されてきた中で、覚悟を決めて新たな厳しさに対応する未来像を今回示していこうということになった。高齢化、人口減少、地球環境、財政の厳しさを含めた低経済成長を軸として生き残りをかけている。地球温暖化の加速に向けた対応もそうだ。

浅岡副会長

温暖化の加速は自然現象であり、むしろまち全体を低炭素社会に移行させるということが所与の条件。低炭素の経済に変えるということ。人口減少や少子高齢化も止めるのか増やすのか対応するのか選ばなければならないという「所与」を明確にしなければならない。

宗田委員長

その「所与」がまさに重点戦略である。

最初におっしゃった地球温暖化の加速については、「低炭素の京都をつくる」ということを一つのめざす方向としたい。この低炭素の京都をつくるために、京都市環境モデル都市行動計画で進めている歩くまち・京都、森を育てるとともに木の文化を大切にするまち・京都、環境にやさしいライフスタイルの推進がここに入る。

人口減少、高齢化については、止めたいことは山々だが、止まらないので対応を検討することとなるだろう。

堀場委員

資料2に年間2千人前後の転出超過と書かれているが、これは若い人が流出しているのか。

事務局（大田総合企画局京都創生推進部長）

若い人に限ったものではない。

堀場委員

147万人のうち2千人であれば、誤差の範囲ではないか。

事務局（大田総合企画局京都創生推進部長）

基礎資料の122Pに、過去3回の国勢調査における結果を示しているが、京都市の特性としては18歳から20歳の方が1万人ほど転入し、20歳代

から30歳代にかけて同様の人数の転出が続くという形になる。

宗田委員長

そう深刻にとらえる必要はないのかもしれない。

尾池会長

若者がたくさん来てたくさん出ていくというのが京都市の特徴である。これを活用すべきで、例えば出て行く人を京都市の名誉市民とすれば、世界中から京都を見ている人が増えることとなる。また京都に帰りたいたいと思って出て行くのか二度と来たくないと思って出ていくかが重要。また戻って子どもを育てたいと思う人をいかに作るか、上手に京都のファンを増やして世界にばら撒く、京都の宣伝隊を作るかがポイントである。

浅岡副会長

宣伝だけでなく、これからの世界や日本の課題解決のためのリーダーを作ることが必要である。

尾池会長

オピニオンリーダーの育成をキーワードに。京都同窓会というか京都市学士会などを作って、その人には京都の情報を流していくという形も面白いのではないか。

宗田委員長

U35でも揉んでいただいて、会長候補はぜひ尾池先生で。

平井副会長

流出する人と京都をいかにつなぐかが大切である。

西岡委員

京都の教育学部で学んだ後、地元で働いてほしいという親の意向に反し、京都に住んで京都で教師をしたいという人が多い。働く場を与えるということが大切である。

宗田委員長

未来像のキーワードにオピニオンリーダー、京都ファンを加える。

次に、財政だけでなく、低経済成長を前提として、働く場についても御意

見をいただきたい。京都市には堀場製作所、オムロンも含め一流のハイテク企業が多いが、市民は存在を知っているものの、学生が名前を知らなかったり、東京の会社と思っているという残念な状況がある。京都企業をいかに学生に知らせるかが大きなポイントではないか。

堀場委員

学生は、京都の企業だけでなく、京都そのものを知らない。海外では学生はオペラ鑑賞が無料になるなど、地域に愛着を持たせるための工夫がなされている。京都も、もう少し学生に対して「知る」、安価に「体験できる」ことを提供すべきであり、企業も市民向けの講座などを積極的に実施することが必要。産学連携は企業と大学のトップ同士で進められることが多いが、学生レベルまで視野を広げた活動を進めてはどうか。

浅岡副会長

発信、オピニオンだけでなく産業を含めて世界をリードできる人を育てることを京都の経済の柱として明確に出すことが低経済成長打破の回答ではないか。その柱は3つあり、まず、低炭素経済の産業を先駆的にリードし、雇用を生んで社会に出すことで、京都にアドバンテージがある。次に、漬物も含めて京都の文化の要素のある産業、そして観光産業で、これを維持拡大していきながら、京都の環境をよくしなければならない。この3つのリンクが雇用を生み、うまく経済を回す柱であることを学生にもアピールすることが必要である。

堀場委員

国際化という問題もある。京都は東京から離れているにもかかわらず、海外の学術的な情報や産業の情報が入る。京都はあらゆる情報を共有するのにちょうどいいサイズである。東京もあらゆる情報があるものの、それらを共有することが難しく、限られた部分しか見えない。今月、フランス総領事館が京都の総領事館としては初めて設置されるが、本当の意味での国際化には大きな財産となる、画期的なこと。真のグローバル化はもはや避けては通れないものであり、インターナショナルな学校の誘致なども進めるべきである。

宗田委員長

京都は外国人の比率が高い自治体であり、大切な問題である。

企業と学生の話が出たが、交流が進んできているものの、どこかで縦割りとなっている。ちょうどいいサイズでグローバルな情報を共有できているこ

とを生かし、縦割りを廃した融合が必要。

浅岡副会長からの御意見であった低経済成長に対応し、未来像のキーワードに低炭素経済、文化と産業のリンク、観光と環境を加えたい。

松山委員

プレミアム観光、他と違うということを重点にすれば、京都独自の生活様式や京都への愛着、誇りを高められるのではないかと。更に京都はやはり違うという認識を持って振興することが必要ではないかと。

宗田委員長

観光については、禅寺にも受け入れやすい言葉をということで「プレミアム」ではなく「質の高い」という言葉とした。質という言葉は残したい。

尾池会長

つくばいにある、吾唯足るを知るというもったいない精神を発信してもよいのではないかと。これも京都の力だと思う。つくばいをロゴにして。

また、伝統文化とあるが、もっと「デザイン力」という言葉に特化しては。友禅染、西陣などのデザインは色といい柄といい世界に通用する素晴らしいものである。西洋流の「デザイン」の考え方をもっと持ちこんで、強調してはどうか。

宗田委員長

デザインとグローバル化を重ねると京都らしさが出せるし、伝統産業も新たな段階を迎えるのではないかと。

堀場委員

パリに行っても、ミラノに行っても、京都の伝統産業の持っている力はどこにも負けていないと感じられるにも関わらず、京都では伝統産業の売り上げが減少している。ビジネスを開拓していくリーダーを育成し、伝統産業のビジネス面を伸ばしていき、結果として伝統産業や職人を守るような一連のビジネスモデルを構築しなければ、いくら一部のローカルなところをサポートしても成り立たない。イタリアの靴は高価だが、お店の裏にある工房を公開し、手間はかかるが質の高い工程を見せることで、買い手は納得させられる。小さくとも経営が成り立つビジネスモデルを町全体が作り上げている。京都でも、そういうビジネスモデルを構築しなければならない。グローバルな情報を提供しながら企業家の展開を市がサポートしていけば本来の伝統産

業が守られるのではないか。良いものがあるのに発信できていないというもったいなさを感じる。

尾池会長

出汁，うま味といった味の文化を京都の文化として市民も認識し，広める必要がある。更に，水もそのキーワードではないか。活断層盆地の豊富な地下水が，半導体などの多くの産業や，茶の湯を生み出した。私は，京都市の会議で外国の水を入れたペットボトルが出てきて怒ったことがある。水の文化，出汁の文化，うま味の文化を京都の魅力として売り出すことを未来像として描いてはどうか。

宗田委員長

浅岡副会長の文化と産業を結び付けることに，デザイン，味，水というキーワードを未来像に加える。低経済成長だからこそ伸びるのが，質の高い観光であり，ビジネスであり，味，水の文化であるということが京都らしさでうまくまとめられそうである。

西岡委員

すこやか部会でも話題となったことだが，京都の特色としては大人が学んで成長できるまちであることが挙げられる。子どもを共に育む市民憲章でも大人も共に成長するというのが特色。この辺は，人材を育てることに含まれていると読んでよいのか。

宗田委員長

縦割の社会を廃して融合していくということを申し上げたが，大人が学ぶことを生涯教育，社会参画ととらえるかはあるが，子育てや支え合いをもうひとつ大きな概念でくくれないかと思っており，その中に含まれると思う。いくつかの未来像をまとめて，新しい社会モデルづくりとならないだろうか。

浅岡副会長

どういう分野で，どういう人材を育成するかということを整理する必要がある。世界に発信するビジネスリーダーやオピニオンリーダー，もう一つは地域を支えるリーダーもある。これを担える発想，スキルをもった人づくりということにつなげるべきではないか。

ひとづくりと全体をつなげていくと大きなバックグラウンドができるのではないか。

——宗田委員長によるホワイトボードのカード整理——

塚口委員

「公共交通」は低炭素の方に近い方が。

平井委員

「住みやすいまち」と連動するとよい。

宗田委員長

「コンパクトシティ」は低炭素のまともに。

「文化を守り伝え育てる」は、味、技、文化と産業のリンクに具体化されたので除く。

「歴史的景観を守り活かす」は、この10年間京都市は相当成果を上げてきたので、落としておく。

「京都独自の生活様式」も特に不要。

「道徳や倫理観」も特に不要。

「京都への愛着」は京都ファンと合わせて。

「交流を通じた新たな雇用」も（経済モデルのところに）入っている。

すると、「低炭素の京都をつくる」で一グループ、「低炭素経済モデル」から「文化と産業のリンク」「デザイン」「京都ならではの観光」の流れで一グループ。

堀場委員

低経済成長で妥協しないということが大切。

西岡委員

経済を活性化するという意味か。

浅岡副会長

活性化というより、新しい京都経済をつくるということ。

尾池会長

「京都型経済モデル」を作るということが大切。

西岡委員

「低炭素の京都」、「京都型経済モデル」など、いずれも目標にした方が考えやすい。

堀場委員

こういう問題があるからこういうことをしますということ。

宗田委員長

高齢社会、人口減少に関しては、「人材を育てる」ということで対応する。一つは若者の力を引き出すということで、京都ファン、オピニオンリーダーが世界に向けて発信していく。その根底に、京都への愛着や理解を深める。

また、「真のグローバル化」がかかってくるが、今までの縦割り社会を融合させていって、自立的なコミュニティを育み、同時に市民参加をさらに向上し、共に支えあい、学びあう社会をつくり、子育てしやすいまちにしていく。

以上の4つのグループにまとめて重点戦略を検討するのでよいか。

浅岡副会長

人づくりはすべてに向けて考えるべきもので、その他の3つはコンセプトを書くものではないか。

市民参加は、10年前はただただ参加というところに限界があった。今回は、参加はさらに具体化されていく。参加は沢山の場面があり、一人が全部ではなく、色んなところに少しずつ参加できる仕組みを目指すべき。

宗田委員長

それが先ほどU35のワークライフバランスでいう仕事と家庭と社会貢献ということであり、参加か社会貢献か、ちりばめられて社会に関わっていくというような考え方だろう。言葉は探すとして。市民参加ではない、社会貢献に近いがそのもう少し手前の言葉。

浅岡副会長

ある意味で協力社会。基本コンセプトである低炭素の京都、低炭素経済、人もつながり、図が描ける。

平井副委員長

参加というと来るのを待つという印象がある。適材適所に配置するためにどういう人材がいるのかを把握する必要がある。市民参加の推進を呼びかけてきたが、どこにどう参加するかが分からなかった。自分がどこで力を発揮

できるかを明確にしてあげる必要がある。

浅岡副会長

「私はこうしたい」と思ったときに行きたいところが見えることが大切。行政自身もこの10年のプロセスで市民の力を引き出したほうが得だということを学んできた。市民もどこであれば自分が貢献したいのかということを考える必要がある。

宗田委員長

100人委員会がまさにその実践の場であった。経済界と行政も協力関係になってきている。市民参加が行政の透明化にもつながってきている。

21の未来像のキーワードがあったが、基本的には共通する概念で4つにグルーピングした。今後、これをベースに未来像をまとめ、重点戦略として事務局とともにまとめ、極力早くお示しし、第3回委員会で検討したい。

事務局（西村総合企画局長）

歴史的景観を守り活かすという項目が4つのグループの中に入っていないが、この間、市民の御協力をいただき、京都市も重点を置いて新景観政策を進めてきた。しかし、町家は減少しており、まだまだ取り組まなければならない。京都が魅力あふれるまちであり続けるには、景観が含まれていないことは寂しい。

宗田委員長

景観に関しては、世界のどの自治体よりも京都市は進めていくだろうという信頼でグループに含めていないが、重い御発言なので項目に含めたい。

浅岡副会長

日々壊れつつある京都のアイデンティティとしては重要なものである。

（2）今後の進め方について

宗田委員長

共汗部会での議論について、ここで報告すべきことがあれば。

塚口委員

第2回まちづくり部会において、計画の推進に財政力・組織力・公衆力が

必要という視点から議論してほしいとの意見があったのでお伝えする。

宗田委員長

会長とも相談しつつ、部会、融合委員会の結論をまとめてお知らせしたい。

尾池会長

来年は戦略をいかに具体化するかについての検討をお願いします。

3 事務連絡

第3回は2月ということで日程調整中。後日ご連絡申し上げる。